亜紀子

大原富枝

新潮文庫

新潮文庫

亜紀子

大原富枝著

新潮社版

686

亜紀子

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草129 B

昭和四十七年十月二十日 発行
昭和四十九年十二月三十日 五刷

著者 大原富枝
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・図書印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Tomie Ôhara 1972　Printed in Japan

新潮文庫

亜紀子

大原富枝著

新潮社版

2086

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

目次

巣鴨の恋人……七
兎……五三
總の木の芽……八一
視界一キロ……一〇九
木苺のみのる場所……一三七
カラスの牢獄……一七三
あじさいの雨……二二三
亜紀子……二四三

解説　上田三四二

亜

紀

子

巣鴨の恋人

一

面会室の三重に張られた金網ごしに、すが子を眺めた一瞬、瀬田は心にアッと思った。これがすが子なのか！

すが子は初め金網の向うの、狭く仕切られた枡の中の椅子にかけていたらしかったが、瀬田がはいってゆくと同時に立上った。

二人とも無言でいた。瀬田は色の褪せた菜っ葉色のプリズナー服をきていた。ズボンにはPの文字が大きくついていたし、手首には冷たく手錠がかかっていた。

すが子はそのような瀬田をまじまじと見つめたまま、口を微かに喘ぐように開いていた。

「シッツダウン、シッツダウン——」

立会のMPが、大きな手でおしつける恰好をして見せると、すが子は呆然と突立ったそのままの姿勢で、怯えたように微かに表情を動かせて、ガタンと尻餅つくように狭い木椅子に腰を下ろした。

瀬田は女の愕いた姿よりも、彼女の変りように呻くようなおどろきを堪えていた。立会のMPの存在も、ここが巣鴨プリズンの中であることも、この一瞬は忘れていた。

これがあのすが子なのか？　人間の変り方というものには、このような種類の変り方もあるものだろうか！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

女の老け方の中には、この種の老け方もあったのか！

それは瀬田があらかじめ持っていたイメージ――失望しない用意に描いたどのような彼女にもあてはまらないような、そういう女の姿なのだ。

瀬田の愕きはかくすことのできる程度のものではなかった。すが子の瞳の中に、泉のような涙が湧いてくるのを、彼は瞬きもしないで呆然と見ていた。

「――お婆さんに、なったでしょ、あたし――」

涙が女の鼻のわきを二筋すべり落ちるのを見て、瀬田はやっと声がでた。

「うん、――それは、お互いのことなんだ」

あのとき三十一だったすが子は、いま数え年で四十になっていた。あの頃二十三だった瀬田はいま三十二になっている。

年齢というものはその人の生きてきた歳月の数でなくて、生活の堆積だということを瀬田はいま骨にしみて感じていた。

この再会を悔いる思いが、瀬田の体のすみずみからにじみでてくる。瀬田は彼女に逢うために、あらゆる手段をつくした自分の努力を、殆ど憎みそうになるほど哀しかった。

「元気でいてくれて、よかったよ――」

自分の低いやさしい声が、他人の声のように瀬田の耳に返ってきた。

「区役所の人が、あなたの手紙もって訪ねてくれはったとき、うれしゅうて、うれしゅうて、もうもう口ではいわれしまへんでしたわ」

すが子はマカッサルにいた頃も、大阪弁と標準語を混合してしゃべったが、いまは一層大阪弁がつよくなっていた。

彼女を探すために尽したあらゆる手段を瀬田は思い返していた。

「きみ、それは止した方がいいよ、きみのためにも、先方の女のためにも、必ず不幸になるんだから。——ぼくが断言してもいい」

彼女を探す具体的な方法を教えてくれた、警察官をやっていたことのある、四十年輩の先輩の戦犯の一人がそういって反対した。

「きみはいま淋しいんだ、しかし、G・H・Qはパロール制度も発表したじゃアないか、そのうち講和も成立する。われわれも社会に帰ってゆくんだ、そのとききっと後悔するよ。そのひとは逢わない方がいい、逢わないで済ました方がお互いのためなんだ——」

「——十年近い年月を別々に苦労して生きてきているはずなんですよ、その生死も確かめない、それも自分の将来の計算のために……というんじゃ、あんまりこの人生がわびしすぎますよ、パロールが発表になったからこそぼくはあれを探す気になったんです。これは生きている限り、ぼくの責任です——」

「そうかい、ぼくは反対だ、自分の半生がじつに無計算だったことを情けないと思っているよ」

「そうですか、それは多分あんたの言葉の方に比重がありますね、ぼくには半生といえる確かな生活は持ったことがないんですから——」

瀬田は素直にそう答えたが、相手に同意したのではなかった。

同じBCクラスの中でも、瀬田のように学徒出陣から戦犯になって、社会の生活の経験のまるでないものと、この先輩のように戦前の社会で働いて生きてきているもの、職業軍人と非職業軍人、または軍属と一般市民など、たずさわった戦争経験の差で、巣鴨の中の人々の生きる態度もそれぞれに異っていた。

「あんたのいうことをきかないで、ぼくはきっと後悔するでしょう、それでもこれはどうしてもぼくの刈り取らなくてはいけない結果だと思うんですよ」

瀬田だってすが子との再会には不安な心地がした。

一番望ましい場合をいえば、彼女が誰かと幸福に結婚していてくれることだった。どんな形でもひとりでなければいい。約束通り、この十年を自分を待ってひとりでいたとしたら、瀬田は一番それが不安なのだ。

自分の上に起った十年の変化を、女の上にも想像してみるのはむつかしくて、あの頃の若いすが子の顔がすぐ浮ぶ。

瀬田は思い迷った末、一つの方法を選んだ。すが子には自分のことは知らせないで、女の現在だけを知る方法である。

こんな、ある意味では卑怯な方法を選んだのは、瀬田の方は、故郷の母親との連絡で、ある程度すが子のその後を知っていたからであった。

瀬田はアメリカ関係の戦犯だったが裁判は濠洲軍に委託されて、濠洲の軍事法廷で死刑の求刑をされ、重労働三十年の判決を受けた。

判決の瞬間まで、瀬田は死刑を覚悟していた。濠洲の軍事裁判は苛酷だという一般の噂にまつまでもなく、彼自身が死に値する罪を犯していると自覚していた。

法廷に出るまでに、彼は身辺のメモにいたるまで整理して、一切を焼きすてた。判決を受けたときも、現地での受刑生活で、生きて故国に帰ることがあろうとは期待しなかった。

すが子と別れるとき、マカッサルで彼女にきいておいた日本の彼女の住所は、O——市のS——区とだけで、町名番地などは全く記憶になくなっていた。

瀬田が最近になって、すが子を探し出す決心をしたとき、瀬田はやはり、O——市のS——区というそれだけしか鍵をもっていなかった。

瀬田はS——区役所宛にすが子の名を選挙人名簿で探して欲しいと依頼の手紙を出した。

一カ月近く経って、「該当者なし」と返事がきた。

そのとき瀬田はもう諦めようかと思った。これを強行することに不幸の予感のようなものを感じた。

しかしやはり諦めるわけにはゆかなかった。瀬田は今度は警察署へ照会の手紙をだした。一カ月足らずでそこからもやはり「該当者見当らず」といってきた。

すが子を探す手段がもう何一つ残されていない、と思ったとき、瀬田は女への恋しさが全身をおし流してくるのを感じながら、独房の便器の腰かけにどっかり坐り、洗面台の蓋の机の上に両肘をついて大きな手の中に顔を伏せていた。呼吸が波を打って荒かった。

マカッサルで彼女と暮したころの一日、一夜が、いままでのどの思い出の場合よりもなまな

しくせつなかった。
一カ月ほどの間、瀬田はすが子を諦めることに馴れようと努めていた。
そういう状態のとき、もう一つだけ、たった一つ残されている手段を、ふいに瀬田は思いついた。そのとき彼が相談にいったのが、先輩の警察官をしていたことのある戦犯の一人であった。
「罰金刑を受けたことのある人間の記録ってものは、どこかに残っているってことはないもんでしょうか？」
瀬田は自分が藁にすがる愚をやっている気持と、確かな緒を摑んだ気持とを同時にもった。
「もちろん残っているさ、罰金刑以上は『受刑者名簿』というのがあってね、区役所に保管されてるはずだよ」
「戦時中の、外地のものでもですか、軍法会議のものでもですか？」
「もちろん、いっさい載ってるはずだよ」
「区役所ですね、どうもありがとう――」
瀬田はだらしなく頬がほころびてくるのが始末につかないほどうれしかった。
すが子は、マカッサルで、慰安所の女将や朋輩の女たちと花札賭博であげられ、軍法会議にかけられて三十円の罰金を科せられていた。
それは瀬田がマカッサルに着任する以前のことで、海軍特別警察隊つきの少尉として赴任した瀬田は、ある日、漫然と繰っていた極秘と印のある書類の中で、ひょいとそれを発見した。
よっぽど常習的にやっていたのか、それともそのとき運悪くたまたま発見されたのか、とにか

くそのときもう彼女に惹かれはじめていた彼は、舌打ちしたいような気持はしたが、戦地の雰囲気ではそれくらいのことは大したショックでもなかった。

いつとなく忘れていたそれが、いまは唯一つの彼女を探す手がかりとして彼に残されているのである。

瀬田は女の住所さえわかったら、現在の境遇を探る手段は別に考えていた。自分がいま巣鴨にいることは、彼女の状態を調べた上でなくては知らせない方がいいと考えていた。瀬田の方に手落ちがあったわけだったが、区役所では瀬田への返事より先に、いきなりすが子のところへ彼の手紙を持っていった。本人から直接返事を出す方がどんなにいいか知れない、と係りの人が考えたのは自然だった。

すが子がここにいる。あらゆる手段を尽して探した女がいま眼の前にいる。どのように変った、と言葉にしていえるものではない。全く異質の残酷なほどの変りようでそこに坐っている。

生活で苦労して老けた女のそれとも、心労や病気で老けた女のそれともちがう、やはり、いうならば、若い日をあのような職業で酷使した女の肉体が、当然負わなくてはならない刑罰のように、ある年齢にまで到達したときに、逃れようなく襲いかかってくる種類の老け方というほかはないだろうか！

すが子はくッくッとうつむいて泣いた。瀬田も鼻の奥が痛んでくるのを堪えた。

瀬田は堪えながら、心の中で、自分の肉体の中で、なにかがさらさらと崩れ落ちてゆく音を聴いた。——それは長い間、瀬田の中で同じ量で、同じ熱度で、湛えられてきていた愛情の崩れ流

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton